

# なほ

11 月号  
vol. 117

巻頭特集

## いくさの軌憶

—むこうとここ—

「秋が街にやってくる」  
橘1丁目付近にて撮影



図1：高江ヘリパッド建設予定地周辺 出典：辺野古浜通信（2016/08/23）  
<http://henoko.ti-da.net/e8908908.html> より  
 地図中の★：わたしたちが立ち会った高江橋の現場

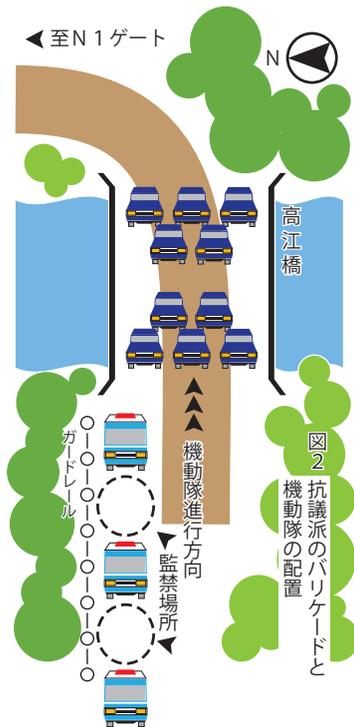


図2 抗議派のバリケードと機動隊の配置

## 巻頭特集

—むこうとここ—

# いくさの軌憶



僕たちはずいぶん長いあいだ空気のような平和の恩恵に与ってきた。だから、それがいない状態をうまく想像できなくなっている。71年前、僕たちの国は他国と戦争をしていた。そしていま世界中で戦争に苦しむ人々がいる。紛れもない事実であることは知っている。でも自分事にはならない。この国が彼の地で戦争に巻き込まれても、ピンとこないかもしれない。戦争ってなんだ？ 平和ってなんだ？ そんなモヤモヤを解きほぐそうと、いまに続く記憶の軌跡を辿って、むこうとこの「軌憶」を考えてみたい。（いくさプロジェクト：田岡・飯島・西田・若松・佐々木）

現地入りしたのに対して、ヘリパッド建設工事車両は高江集落のある南からやってきて、N1ゲートからやんばるの森に入りN1地区の工事に取り掛かるうとしていた。抗議派はそこに至るまでの橋上にて、搬入を阻止する体制を整えている

リーダーの指揮のもと車によるバリケードが形づくられていく。状況に応じた陣容があるようだが、最終的には図にあるように、5台1組のバリケードを2セット設置した(図2)。さらに車の間を人で埋め、撤去

## 監禁場所の光景

午前9時30分ごろ、機動隊の応援部隊が到着し、一〇〇名を超える隊員が橋上のバリケード前まで迫ってくると、隊長が指揮棒を前方に振り下ろした。これを機に隊員は俊敏に動き出し、車の撤去作業に取り掛かる。車の間を埋めた抗議派の人数を数人がかりで排除する。筆者はその様子をカメラに収めようとファインダーを覗き

列が伸びる方向に歩いていくと、ダム湖に架けられた高江橋の上に人だかりがある。どうやらこの日の拠点はここに定められているようだ。橋の向こうにも車列が伸びており、静かではあるが物々しい雰囲気漂っている。

地図(図1)を使ってこの状況をもう少し俯瞰してみよう。われわれが立ち会った現場は県道70号の高江橋である。楚洲に宿泊したわれわれが北から

込んでいると、いつの間にかその最前線に立っていた。他所から来た新参者として静観しているつもりだったが、目の前で展開される光景を見ているとそういうわけにもいかず、微力ながら抵抗しようとする。踏ん張ってみたものの、肚の据わり方がちがうので、あつという間に相手陣に引っぱり込まれて監禁場所に収監されてしまった。じつにトホホなありさまだった。

以上のような顛末で筆者は身柄を拘束されていたので、この日の抗議活動の全貌は知りようもない。その代わりに、目の前で繰り広げられた出来事

## 沖縄編 その2

### 高江の困難と

### 平穏な日常を繋ぐ軌跡

前号と今号にわたって8月21〜23日に佐々木と若松が取材した沖縄県国頭郡東村高江のヘリパッド移設をめぐる現状について報告します。ただし、報告は取材日現在のものであること、また重複する部分があることを予めお断りしておきます。



## 高江橋に至るまで

8月22日午前6時、楚洲の宿を出発し、前日に来た県道70号を戻っていく。途中でヤンバルクイナをみかけたが、その愛嬌ある姿をみると、高江の人びとがやんばるの森を大切にすることが持ちもわかる気がする。

30分ほど車を走らせたところで路上駐車車の列が現れ、われわれの車もそこに加わった。車

作業を妨害する作戦となった。その後の様子は、前号の記述にあったとおりである。

を筆者の観点をつうじて語ってみることにする。気になったのは、高江の人びとに困難な境遇を強いているのは誰か、ということである。

「監禁場所」というのは高江橋から20〜30メートルのところに駐車されている3台の護送車(通称「カマボコ」)の間のスペースのことである。左右にはカマボコが立ちほだかり、後方には車道のガードレール、前方には精悍な顔つきをした20歳代半ばの機動隊員が人垣をつくっている。バリケードから排除された抗議派は、撤去作業が終わるまでの約1時間30分、一時的にここに収監されたのである。

抗議派の人びとは収監されても一向に抗議の手を緩めない。目の前に立ちほだかる機動隊員の列を押し込んだり、人垣の脇をかいくぐろうとしたり、あるいはガードレールを乗り越えて森の中に身を潜めようとする。

その迫力に気圧されながら、一連の光景に対して筆者は心情的に一定の距離を置いていた。抗議の本来の目的は、目の前にいる機動隊や建設作業員ではなく、このような状況を作り出している意思決定者たちだ、という思いがあったからである。

## むこうとここをつなぐことば

とする。カマボコの下に潜り込んで監禁場所からの脱出を試みる者もいる。抗議活動を排除する法的根拠を質す者、身柄を拘束されているわれわれの待遇改善を求める者、やんばるへの愛を説く者。機動隊の鼻先を指さし、「それでも人間か!」「人間の心を持ってないのか!」「お前は自分で考えて行動しようとしなさい、ただ指示を待つだけの機械だ!」などと挑発したりもする。

その迫力に気圧されながら、一連の光景に対して筆者は心情的に一定の距離を置いていた。抗議の本来の目的は、目の前にいる機動隊や建設作業員ではなく、このような状況を作り出している意思決定者たちだ、という思いがあったからである。

「平穏な」世界にも向けられていると感じた。高江の人びとを窮地に追い込んでるのは誰か。端的には、日本国の政権に就く意思決定者たちであるとは言えるだろう。しかし、その現状を追認または黙認している者たちの存在を見過ごしてはならない。そう、人垣をつくる機動隊の若者たちのように、目の前の与えられた仕事を淡々とこなし、「いくさ」なんて縁もゆかりもない遠い国の出来事だと感じながら日常を生きているわれわれのことである。



隊列とのせめぎ合い

だから、いたずらに機動隊員を挑発する言葉にやや失望したりもした。「機動隊員の反感を買ってどうなるというのか?」と。国家に立つてつく危険分子扱いされてもおもしろくない。

その中であって筆者の記憶に残っているのは、なぜ自分たちがいま機動隊の若者と対峙しているのか、その経緯を説明し論そうとする者の言葉であった。彼女はたしか大阪で活動する舞台俳優で、高江には何度も足を運び、やんばるの森や高江の人びとの日々の平和を願っている。

わたり来たという。彼女は機動隊の若者に向けて語りかける。はっきりと憶えているわけではないが再現を試みよう。

わたしたちは、あなたたち機動隊が職務を全うすべく任務を遂行しているにすぎないこと、その中にあるにも乱暴になりすぎないよう配慮してくれていることを知っている。しかしわたしたちはこうして衝突せざるをえない境遇にある。なぜか。わたしたちはこの国で認められた正当な手続きにしたがって、自分たちの主張を述べ、政治的な成果もあげてきた。現知事を選挙で当選させ、話し合いに応じるように求めてきたのに、国はまったく耳を傾けようとしてくれない。わたしたちとあなたたちは同じだ。わたしたちは好きでこんなことをやっているんじゃない。こうせざるを得ない状況に追い込まれていることを、どうか、そのことを

わかってほしい。

同行したスタッフに言わせれば、これもまたよくある語りかけの一つだそうだが、どうやら筆者はこうした語り口に共感をおぼえる性質のようである。

その語りは向こう側に声を届けようとする話者の姿勢を伝えている。それをうけて筆者は、機動隊の青年らに向けられた彼女の声が、彼らだけでなく、その背中に広がる日常の世界、われわれが慣れ親しんでいる

「平穏な」世界にも向けられて

いると感じた。高江の人びとを窮地に追い込んでるのは誰か。端的には、日本国の政権に就く意思決定者たちであるとは言えるだろう。しかし、その現状を追認または黙認している者たちの存在を見過ごしてはならない。そう、人垣をつくる機動隊の若者たちのように、目の前の与えられた仕事を淡々とこなし、「いくさ」なんて縁もゆかりもない遠い国の出来事だと感じながら日常を生きているわれわれのことである。

翌日は高江を後にして首里城や平和祈念公園の「平和の礎」を訪れた。行く先々で目にする南国の風景はとても穏やかで美しかった。高江の光景とあまりにもかけ離れたその心地よさに包まれながら、こんなことを思った。70年余さまざまな欺瞞や矛盾を抱えながらも、日本に住む多くの人が平和を享受



平和の礎にて

してきた。「平和ボケ」などと揶揄／自嘲する言葉もよく耳にするが、平和の享受それ自体は誇りに思っているのではないかと。ただ、その平和は沖縄や高江の人びとの犠牲のうえに築かれてきたこと、いまの平和は「いくさ」と繋がっていることへの感性を失ってはならない。高江という現場はそのことをまざまざと教えてくれた。彼らの困難を忘れずに平和な日常を築いていく実践がわれわれに求められている。

文責:若松 司



太鼓の音は気分を昂揚させもするし落ち着かせもする

# きんこん がこん

ver.1.1

教育に取り組んでいるのは学校だけじゃない!小中高のほかにも地域の教育事業で活躍する団体・施設・仕組みを紹介していきます。

17時間目: スターブレインズ



うまく色をつけたかな?

英語だけで1日過ごすねん「スターブレインズ」

西成に2つめの学校が4月から開講

2016年4月から、西成区出城のパークコート3Fでインターナショナルスクール「スターブレインズ」が、オープンしました。すでに神戸で事業を行っており、大阪など遠方からも通う子が多数いるなど、たいへん人気があります。代表取締役の末次さんは神戸校の実践を別の場所でも行いたいと考えていたところ、パークコート3Fの借主を探していた施主と思いが一致して西成で事業を開始することになりました。神戸校はマンションの一室にあるため、新事業を実施する際には場所を離すことになっていま



時計をつかった授業ももちろん英語で!

すが、西成校では1フロアで様々な事業を実施することができず。今回はそんな西成校について報告します。



[沖田一志]マイカーの走行距離が10万キロを超え、部品交換、修理が増えてきました。買い換えを勧められますが、10年も乗っていると出や愛着がたくさんあります。それに、先立つものが..

スクールではすべて英語で過ごします

スターブレインズの取り組みの特徴は、校内の会話をすべて英語で行うことです。日常とは違った時間を過ごすため、子どもたちも最初は戸惑うことが多いようですが、しかし慣れてくると、恥ずかしそうに話していた子どもたちも、日を過ごすうちに自信を持って話すようになります。また、スタッ



クッキングに集中

フ全員が外国人というのも大きな特徴です。英語を学んだスタッフが教えるのではなく、生まれてからずっと英語で生活してきた人たちが日本に来ているので、本場の英語を学ぶことができます。

幼児期に多種多様な体験を

そして、カリキュラムにあるクッキング(料理)やミュージック(音楽)ももちろんすべて英語で行われます。調理をしたり、楽器を鳴らしたり、体を動かすことに子どもはとても関心を持ち集中します。そういった体験での会話に出てくる1つ1つの単語を子どもたちはすんなりと吸収していきます。その他にも、体操やヨガ・ダンスなどのスポーツやハロウィンやクリスマスなどのイベント、神戸校との交流や合同イベントなども行われています。また、これらの体験授業は、習い事にはつきものの送り迎えが不要なためご家庭の方にも大変好評です。

地域とのコラボの期待

開校から6ヶ月経ち、西成でも活動を広げ始めたスターブレインズですが、地域との連携はまだ十分には行えていないよう



体操教室で鉄棒にチャレンジ

に思います。スターブレインズが入居しているパークコートには1・2Fがにしなり隣保館、4・5・6Fはサービスマン向け高層者向け住宅になっているので、まずはここから連携を始められたらと考えています。そして、将来的には子どもたちが地域の行事に参加して発表したり、様々な人たちがスターブレインズともかかわるようになればと思います。

レポート: 寺嶋公典  
沖田一志



[寺嶋公典]同級生と28年ぶりに会った。クラスは別々やったけど楽しかったなど話は弾んだ。その後、嫌な予感があったので、中学の卒業アルバムを見てみると3年の時のクラスメイトだった..

# 「なび」をつくる(株)ナイスな仲間たち

『なび』をつくる(株)ナイスは、地域での取り組みも、社会に向けた取り組みもいろいろ。多様につながる実践を紹介していきます。

## 一般社団法人エル・チャレンジ福祉事業振興機構 VOL.31 工賃向上プロジェクト



前号に続き登場する2つ目のエルは、施設で働く障がい者の工賃アップにチャレンジする(一社)エル・チャレンジ福祉事業振興機構です。約9年間の取組で大阪府の工賃は向上しました。でも、障がい者施設がもつ多様性を“工賃”という言葉でひとくくりにできますか?工賃向上を通じて見えてきたいまをプロジェクトリーダーの栗津さんに紹介いただきました。

### ひと昔前

ひと昔前、大阪には障がい者が日中を過ごす場所としてたぐさんの『福祉作業所』『授産施設』というものがありませんでした。それらは国の法律が変わり、就労支援に取り組み施設や介護を提供する施設などに再編されました。その後、施設で働く障がい者の工賃水準を引き上げようという「工賃倍増計画支援事業」が打ち出されました。当時、大阪府の障がい福祉施設の平均工賃は1か月8千円弱と全国で最も低い額でした。大阪府がこの事業をはじめたのがあって、その担い手として手をあげたのがエル・チャレンジ(大阪知的障害者雇用促進建物サービス事業協同組合)でした。平



地域清掃



マルシェ

成19年からはじまったこの事業は平成24年に「工賃向上計画支援事業」となり、事業の担い手も一般社団法人エル・チャレンジ福祉事業振興機構に継承されています。

工賃向上にむけた3つの取組  
私たちの現在の活動の柱は三つあります。

### 社会参加のカタチ

一方で、施設の工賃があがることは大切なことなのですが、そのことを自己目的化してはいけないと思います。確かに工賃は1円でも高い方がよいのですが、高い工賃を実現することだけが施設の目的ではないからです。むしろ、「こういうふうになりたい」「もっと高い工賃がほしい」という障がい者本人の想いを実現するために施設がよい社会参加のカタチを目指すことが大切で、工賃額自体は活動のひとつの指標ととらえるべきだろうと考えます。私たちは、そういった施設の取り組みを支える「社会的な仕組み」をつくることを目指して活動を続けています。

文責..栗津 浩

### 工賃向上プロジェクト

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 大阪市教育会館  
☎06-6949-3551 FAX:06-6920-3522  
Mail:kouchin@l-challenge.com  
URL:http://l-challe.com/kouchin/

### ①施設が工賃を上げるための計画づくりの支援

「計画のつくりかたがわからない」「思うように計画が進まない」といった困りごとに応じる相談窓口の設置や施設の経営力や販売力を強化するための集団セミナーの開催など。

### ②共同受注窓口による受発注の推進やネットワークづくり

企業や官公庁からの発注について、仕事を受ける施設とのマッチング。また地域ごとの共同受注グループとのネットワークの構築や製品販売会の開催。

### ③施設の取り組みなどの情報発信

ホームページでの施設情報の提供やメールマガジンの発行。施設の活動を応援するサポーターの登録など。

私たちはこうした取り組みを通じて、施設と企業や地域とのつながりをつくってきました。その結果、大阪府の平均工賃も平成27年には1万1千円を超えました。まだまだ十分ではありませんが、確実に上昇を続けています。



(左)お菓子作り(上中)スタッフ会議(上右)セミナー(右下)一人ひとりの特性に応じた治具



[谷口円]最近めっきり作品としての写真を撮っていません。先日知人のギャラリーに久しぶりに立ち寄ると、変わらず写真表現に向かい続ける姿があった。「そのままがいいの」と問われた気持ちでした。



[田岡秀明]コトノネという雑誌の表紙がサッカーの高原選手だった。今は沖縄のJ3のチームで闘いながらも、自然栽培で農業にも取り組んでいるそうだ。セカンドキャリアに百姓を選ぶセンスがたまらない。



[飯島照喜]台風が過ぎ去り、秋が忍び寄ってくる季節。今年は、暑いなあ、寒いなあ、ですませる日常会話。日常の挨拶さえも、地球温暖化の影響をうけているのが、季節感と季節感がなくなりつつある日々を秋の深まりとともに感じます。



今月の花:ケイトウ

花言葉「色あせない恋」「情愛」「おしゃれ気取り」  
鶏のとさかのような形をした真っ赤な花を咲かせます。最近では、キャンドルに似た形のものもあります。



開店当初に働いてくれていた元気なおじさん! それっきり、あいさつをしても避けるように歩いていたおじさんでしたが、最近は、自分から話しかけてきてくれて、毎日色々なお話をします。かなり高齢だとは思いますが、毎朝ランニングをして身体を鍛えておられます。ふくらはぎの筋肉がすごいです。毎日パワーをもらいます。(なんばひとみ)

hidarimaki



国際フェスティバルで、ウイーンフィルを聞くことができました。ズービン・メータでの指揮は、レコードなどでなじみはあったものの、やはり交響楽はすごかった!

傀儡子があやつる復古という炎暑

再読の書文字小さく紙魚増えて

初秋刀魚朝まだ魚臭漂える

知事の末路  
晩節に太陽墮ちて夏季終わる

曼殊沙華紅一輪の自己主張

月去つて夜にさまよう鱗雲

# い湯かげん

さあ、総合区が始まる!

もちろん、政治の世界の一寸先は闇なんだが、松井知事(維新代表)が、総合区を先行実施しても良いと明言し、合区についても維新(5区案)も公明(12区案)も自説に固執しないそうで、自民も総合区賛成だから、2年半後の大阪府議府議選は総合区最初の選挙となるかもしれない。仮に5区案なら市議は一区16人前後で、総合区常任委員会を構成することになり、区長は任命でも議員は選挙で選ぶわけだから、都構想を半ば実現したことになる、政令都市大阪市も存続するのだから、過日の住民投票の民意を反映した見事な着地になる。

その記事はシステマチックで、議論がいたって無機質なものは何故か。そんな折、鈴木亘さんが『経済学者、日本の最貧困地域に挑む』という本を出版した。鈴木さんは西成特区構想担当の大阪市特別顧問だった人だが、鈴木さんを総合区区長だと想定して読むと、この本は想像力を掻き立てられて面白い。もちろん、「西成特区」は実際は「あいりん特区」という限定的な政策だったけど、鈴木さんがポリーングに例えて「構想はセンターピン」と表現したように、西成区域や広く大阪市域への波及性を思い描いていた。

廃校の危機に瀕した二つの小学校と一つの中学校を「いまみや小中一貫校」に統合したのは、その象徴だった。隣接するわが地域の二つの小学校も統合の危機にあるわけで、この「センターピン」の先行例は参考になる。貧困家庭への「教育パウチャー(いわば、使途の決まったクーポン)」も、福祉の発想を転換するものだった。「あいりん総合センター」というのはこの地域にしかない、住民にとっではいわば「迷惑施設」。その建替問題を地域住民が広く参加する「まちづくり会議」に丸投げするという手法も発想の転換だった。鈴木さんは、あいりん地域を「領有権の設定されていない漁場」に例えたが、地域の実際の居住者に領有権を付与して決定を委ねる手法は功を奏した。ごみ問題等都市課題へのアプローチを示唆するものだった。そして、行政と市場に対する住民側のハンディを補完するために「エリアマネジメント協議会(自治の経営体)」や「まちづくり合同会社」の設立を応援したことも、自治への「持続可能な住民参加」を示唆したものだった。

株ナイス代表取締役  
富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「い湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

橋下さん(前市長)はTVのコメンテーターになっても面白い人で、「そもそも自治体は歳出ばかり議論するけど、政策を実現する新たな税金を徴収できることを忘れて」とコメントしていた。たしかに、欧州の自治体は、歳出だけじゃなく歳入、つまり課税も毎年議会で決めてから徴収することになる。総合区は何でもできる。とまでは言わないが、これまでの常識を超えていくまたとないチャンスになることは間違いない。学校の統廃合に象徴的な「縮む地域」など、いま、都市は常識を問い直さなければならぬ時代を生きている。

[若松司] 父が墓を買った。その場に居合わせた。悪くなかった。滋賀から望む比叡山は数少ない大切な思い出の一部。父の後は自分が引き継ぐ。そのあとは?

[西田吉志] 10月2日(日)、長橋小学校の運動会を観に行った。運動会では、普段ゆ〜とあいで見せる顔とはまたちがったことも達の顔を見ることができる。次は、授業を受ける姿を見たい。

おと その①

商店街通りを一本折れて、さらに路地に入ったその奥の昔ながらのアパートの一室、6畳2間。とても静かなこの場所は、いろんな“おと”が聞こえる。

テレビを見ながら大声で笑うおっちゃんの声。夜中にトイレに立つときの廊下がキシム音。ノツン、ノツンと買い物袋を持ちながら階段を一步づつ登る音。今にも湯気とともに良い香りがただよってきそうな台所の音。

下からは、住民さんとヘルパーさんの楽しそうな話し声。たまには、電話先のだれかへの怒鳴り声。もうお父さん施設もどりはったん。やれやれや〜。いきなりさむ〜になりましたね〜。そうやね、風引くわ。昨日、阪神勝ったなあ! ほんまやでえ〜!“トントン!” お金かしてくれませんか。もお〜。

イキイキと、いつも通りの生活が聞こえる。そんな場所。

たの 3くほろたま

6 畳 2 間

卓球の愛ちゃんが結婚した。何って同年。こんな形で自分の年を実感するとは。でも皆から「少し見んあいだに大きくなって」って、やっぱり天才卓球少女で「泣き虫愛ちゃん」。(安田拓也)

なび 11月号 (vol.117)  
発行日: 2016年11月1日 (創刊日: 2007年1月1日)  
発行: 株式会社ナイス  
発行人: 代表取締役 富田一幸

住所: 大阪市西成区長橋3-6-33  
電話: 06-6563-1156  
E-mail: info@nice.ne.jp  
url: http://www.nice.ne.jp/

編集長: 寺嶋公典  
編集: 飯島照章、沖田一志、佐々木敬明、田岡秀朋、西田吉志、安田拓也、若松司 (あいうえお順)  
イラスト: hidarimaki デザイン: 谷口円

# にしょい 飯ユラン

メシ

8軒目

『YAMA  
CURRY and CAFE』



ミシュランならぬ“飯ユラン”。匿名でなく飯島 (だから飯(メシ)ユラン) が「店主がおもしろい」、「店の客が楽しい」、「料理が、味がおいしい」の3つの「い」を基準に、西成区内の飲食店などを紹介します。

飯シュランの面白いところは意外性に出会うところにある。カレーライスやラーメンと並ぶ日本人の国民食とよばれるほど人気のある料理で、カレーツウも多い。カレーとカフェの店 YAMA はカレー“ツウ”が通う西成でも老舗のカレー専門店。父親が 1972 年に長橋で開店し、長男の中本整さんが店を継いで今年で 44 年になる。

とにかく物事に妥協せず、「これだけは譲れない」と素材やルーづくりに、さらにお客さんにも“こだわる”人である。淡路産の玉ねぎ、リンゴ、ニンニク、肉汁そして 12 種類の香辛料、ルーづくりはカレーの命である。「カレーはソース、カレーライスをご飯の上にカレーというソースをかける。だからトッピングのエビやカツが生きてくる」。ルーづくりからお客に出すまで 1 週間かかるという。味はまるやかで奥行きがある、そして上品である。「カレーは奥が深い」。

意外な話が飛び出してきた。「この7月から土日・祝日の夜、完全予約制、貸し切りで、串カツ

のコース料理を始めました」。カレーと串カツ、何で? 「串カツは西成の地場産品、小さいころから慣れ親しんでいる。10年前から本格的に提供したいと考えていた」。カレーのルーの仕込みは毎回味が異なり、同じ味をだすのがなかなか難しいそうだが、串カツは同じ味を出せる。そのこだわりはソース? いやいや“ころも”だそう。ころもはハードとソフトの中間、お客さんの口当たりを大切にしているという。長年の思いを形にした、それもカレーという奥深い料理で培った味やお客さんへのこだわりを、串カツでも再現。そのころは「おいしいと言ってくれる言葉」。

## YAMA CURRY and CAFE

場所: 西成区出城 3-5-11

電話: 06-6562-1475

営業時間: CURRY and CAFE 平日 11:00~14:00

串カツ (予約制、8名まで)

土曜日 19:00~21:00

日曜日 17:00~19:00、19:30~21:30

## あとがき

紅葉の季節ですね。僕が京都に居た時の楽しみの一つに、弾丸紅葉狩りがあります。縦横無尽に走る自転車で、南は伏見の中書島から北は嵐山や大原三千院まで、シーズンの混雑を横目に颯爽と楽しむ。交通費不要、一度で10箇所以上の名所を巡り、何より自転車で汗流せるわで申し分ない。そしてそのあとのご飯がまた美味しい。これぞまさに一石四鳥。大阪でもやってみよう! (安田)